

北河内地域における生活環境と 環境デザイン原理に関する研究

Research on Man-environment and its Environmental
Design Principle in Kitakawachi Region

主任研究員：谷口興紀

分担研究員：川上 貢 山村 悟 植松曄子 谷口興紀 竹嶋祥夫 榊原和彦
奥 哲治 中川 等 浜田ひとみ

全体としての進捗状況は、表-1 のようである。新たに「？」が付いている欄が現れている。これは、素材的にその分野における展開の可能性を示すという意である。今年度の総括として、分担研究報告の中のキーワードを手がかりに、その連関を辿る。

地域研究や地域計画において、宗教的なもののうち、信仰の事柄は、その個人的性格の故に踏み込むことは困難である。しかし、広い意味で宗教的な事柄が地域に多数存在している。今年度は、教团的・教条的性格が希薄と考えられる路傍祠について、実体的事柄の調査が着手されている¹⁾。このような広い意味で生死に関わる事柄を含んだものを一つの極端として、それに続くものとして、高齢化社会というテーマがあり、各自治体の老人保健福祉計画事業の分析がなされている²⁾。「保健」面ということに加えて、「遊び」面などへの展開の可能性も伺える。次に、子どもたちの学校教育の場がテーマとして取り上げられ、「人間が人間になる」(人の成長)ということが、「植物の在り方」(自然の成長)を契機として研究されている³⁾。さらに、樹木に加えて、「菊花」を主題とする遊びの世界としての「ひらかた菊人形」への着目がなされ、環境彫刻・環境造形を通じての地域の関わりにおける新しい展開が見られる⁴⁾。また、植物である「綿」・河内木綿の研究も継続的になされており、その途次において、地域の神話・伝承などが紹介され、これも一種の「遊び」(世界象徴)に通じるものがある⁵⁾。「デザイン」は、言葉の本来的な意味で「遊び」であるという言い方を思い出させる。

翻って考えると、研究志向は、世界象徴の形式の選択であり、研究思考は、その形式の上での展開と言えなくもない。すなわち、神話的志向・位階的(または順序的)志向・解析的(または併在的)志向など。環境デザインの発現の一つである住宅地(集落)の「景観」を主題にしながら、連続的立地の中に、明快な景観の対照を読みとるという位階的志向⁶⁾と解析的(仕掛けの、さらに操作化を目指す)志向⁷⁾との二つのアプローチが取られている。これらの研究からは、「どうあるか」、「こうするにはどうするか」がまず、出てこよう。さらに、本研究のもう一つのテーマである「どうすべき」というデザインの志向へと進むことが期待される。しかし、そこには「研究」の立場と「デザイン」の立場との差異をどう乗り越えるか、それらをリンクするにはどうするかというテーマが伏在している。そのヒントになるのが、寸法を押さえるという観点である。単に「もの」の数値の計測ではなく、人間との関係で「寸法」を考え

表-1 研究全体の進捗状況 (1993年度枠組一部修正)

環境領域区分 学術の区分	理念・ロゴス 作業・ワーク	カテゴリー 以前・非表象	歴史・文化 (通時的) 未来史 生活史 建築史 集落史 都市史 産業史 その他	個別テーマ (共時的)				
				場所的分節		地域分節	地球基盤	情報分節
				生活分節	空間分節			
学 系 術 系	資料 収集	リ?	イ i p □ I P T 3 5 8	m H 7	e h H M ト	m i M I 8 リ	m I	i h I 8
	整理 ・ 解読		イ p □ P T チ I 5	m H	e h E H M △ト	m p M I △チリ		
	調査 ・ 研究		イ p □ P △ l	△ト l	e h E M A 2 ※△ト	p P A l チ※リ △△		4 ニチリ
	計画 ・ 提案				e 7 ト			4 ニ
	教育 ・ 養成		T					

カタカナ：1994年度、数字：1993年度、英大文字：1992年度、英小文字：1991年度
 4, 1, P, p：川上 貢：北河内地域における建築生産に関する史的研究
 □, 2, A：山村 悟：北河内地域各市における公共空間の視覚的アトフィに関する批判的研究（広場・公園・ニュータウンの造形物を中心として）
 △, 3, T：植松暉子：北河内地方のクラフトと生活環境空間について
 ニ, 4, I, i：谷口興紀：北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究
 ※, 5：竹嶋祥夫：北河内地域における高齢者の住環境と生活に関する研究
 △, 6, M, m：柳原和彦：北河内地域における環境デザイン手法の操作モデルに関する基礎的研究
 ト, 7, E, e：奥 哲治：学校教育と地域環境のかかわりに関する基礎的研究と具体事例（北河内地域）の調査研究
 8, H, h：中川 等：北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究
 リ：浜田ひとみ：北河内地域における路傍祠に関する調査研究

るという、いわゆる「尺度」観念の導入である。たとえば、近世の北河内地域の農家の研究があり⁸⁾、そこでの梁行き・桁行き寸法の分布は、人間的尺度を含んで意義深い。この点をさらに押し進めるには、デザインの立場からのパースペクティブに「研究」を位置づける方向への展開の必要があろう。そのための試行的試みとして、研究における分布図などをパースペクティブに描くという着想がある⁹⁾。これは、「研究」が、理論化や普遍化・一般化のため現実捨象的になることからくる錯覚からの立ち還り、例えば、理念的無限性からの現実的有限性への立ち還りなどに通じていくのではなかろうか。

注

- 1) 浜田ひとみ：北河内地域における路傍祠に関する調査研究
- 2) 竹嶋祥夫：北河内地域における高齢者の住環境と生活に関する研究
- 3) 奥 哲治：学校教育と地域環境のかかわりに関する基礎的研究と具体事例（北河内地域）の調査研究
- 4) 山村 悟：北河内地域各市における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究（広場・公園・ニュータウンの造形物を中心として）
- 5) 植松暉子：北河内地域におけるクラフトと生活環境空間について
- 6) 榎原和彦：北河内地域における環境デザイン手法の操作モデルに関する基礎的研究
- 7) 中川 等：北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究
- 8) 川上 貢：北河内地域における建築生産に関する史的研究
- 9) 谷口興紀：北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究

分担研究報告

北河内地域における建築生産に関する史的研究

川上 貢（工学部）

河内国大工組のうちの一つである古橋大工組の旧組頭平橋家が所蔵する普請願書のうち、今回は農家の普請願書を資料に同組支配地域の河内国交野、茨田、讃良三郡および摂津国東成郡の村々における農家について家屋規模と平面間取りにみる特色について検討した。

願書は天和4年（1684）のものを筆頭に幕末まで多数をかぞえるが、それらのうちの享保5年（1720）までの比較的に初期に属する35年間のもの258点を対象とした。

願書のうちには家屋図を添えたものがあり、屋内の間取りと室名を書き込んでいて、造立予定時の平面形式を知るのに参考になる。北河内における近世農家遺構で現存するものは極めて限られ、国文化財に指定されているものは二例にすぎない。こうした状況のもとで、これらの普請願書は近世初期における北河内地域の農家のおよその傾向を知るうえに参考になる。

普請願書にみられる家屋規模の内容を整理すると次の通りである。

- a) 梁行4間のものは桁行が7.5間以上12間までのあいだに分布している。そして桁行8.0間から9.0間のあいだに多く集中している。
- b) 梁行3.5間のものは桁行5.0間から12.5間のあいだに広く分布しているが、大半が6.0間から8.0間のあいだに集中している。
- c) 梁行3間のものは桁行5.0間から10.5間のあいだに分布し、大半が6.0間から8.0間のあいだに集中していて、梁行3.5間の場合にはほぼ等しい傾向を示している。

次に、高持ち農民の石高の多少と家屋規模との関連について検討すると、

- a) 梁行4間の場合、50石以上が15/20例で、40石以下がわずか5例しかない。
- b) 梁行3.5間の場合50石以上は18/155例であるが、20~40石は96/155例で過半を占める。

梁行3.5間以下は高持ち農民のうちでも中間階層の平均的規模を示すと考えられ、間取りは四間取りが規模の大小の別にかかわらず最多の形式であることが知られる。広間型は四間取りよりも数は少なく、規模が梁行3.5間以下のものに多い。

間取りの発達過程の上で一般に広間型が先行し、次ぎの発展段階の形式として四間取りが成立したと考えられている。ここに取り上げた資料は天和四年（1684）から享保五年（1720）までの一時期における状態の分析であって、この時期には四間取りが広間型や他の形式よりも多数の事例がみられ、この地域では四間取りが早く普及していたことが知られる。なお、普請願書のうちの寛延3年（1750）3月に新築を願ひ出た讃良郡木田村の長左衛門家は食い違い四間取りの基本型に角屋座敷を付設していた。交野市寺に所在している山添家住宅は宝永2年に造立されたもので、国の重要文化財に指定されていて、その平面形式は長左衛門家と同じ類型をつくることが知られる。

北河内地域各市における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究 山村 悟（工学部）

1. 長期的共同研究『北河内地域における生活環境と環境デザイン原理に関する研究』の2年目から参加して、分担課題を「北河内地域各市における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究」と決め、鉄道駅前や市役所庁舎の広場、公園あるいはニュータウンなどのいわゆる「環境造形」「パブリック・アート」の実体調査を順次、継続的に行ってきた。

それと並行して、近年、美術・建築・都市デザインなどの各分野で使われることが多くなった「パブリック・アート」あるいは「環境造形」という用語の今日的意義と概念を、戦後日本の「野外彫刻」史検証によってさぐる作業をすすめ、まず小論『日本の環境造形——原点としての宇部市と神戸市・比較研究——』（『大阪産業大学論集』人文科学編79号、1993年5月）としてまとめた。また、後発ながら彫刻シンポジウム（公開制作）開催によって「彫刻のある街づくり」を進めている池田市、兵庫県社町などのケースを現地調査し、自治体、プロデューサー、造形作家などそれぞれのサイドから環境造形設置についてのコンセプトと現実の問題点をさぐ

る作業をしてきた（1993年6月24日付毎日新聞夕刊文化面への寄稿『花盛り、地方の彫刻シンポ——まちづくりの一環として』）。なお、私の指導する卒業研究ゼミから、この2年間で5人の学生が「環境造形」に関するテーマを選び、「北河内」地域では『彫刻のあるニュータウン——四条畷市・パークヒルズ田原の場合』『関西文化学術研究都市——パブリック・アートが創る遊び空間』などの調査研究が提出された。

2. 『北河内地域研究』の表題のアプローチでは、平成6年度も枚方市、四条畷市の主な公共的スペースでの造形物について調査を続けた。

しかしその過程で、京都・大阪の中間にあつて大きな市域を有し、古来、交通の要所でもあつた大阪府枚方市（1947年市制施行）と同市域を走る京阪電気鉄道にとって、きわめて重要な「ひらかた菊人形」の地域発展に果たした役割に強い関心を持った。

1910（明治43）年開通の京阪電鉄が沿線開発と旅客増の一手法として興行師、造園業者や人形師らに依頼して同年秋、枚方・香里遊園地（現在は住宅団地）で始めた菊人形は、その後、宇治、千里山での開催や戦争による中断などの曲折を織り込んで1949（昭和24）年から現在地で「ひらかたパーク」（京阪直営。年中開園の総合遊園地）の秋の大イベントとして確立し、広く知られる。枚方市の都市形成と財政にとっても菊人形と遊園地の存在は欠くことのできないものになっている。この菊人形という催事がまちづくりに及ぼした影響を調べるとともに、菊花という植物素材によるきわめて日本的な造形を（文献では19世紀初頭、文化年間の江戸や名古屋にまで菊細工、菊人形の起源をたどれる）、環境造形、環境デザインの視点でとらえて調査研究を続行したい。

北河内地域におけるクラフトと生活環境空間について 植松曄子（工学部）

北河内地域の代表的なクラフト河内木綿を、平成4年より5年度にかけて調査・分析を行い、河内木綿の導入と発展過程・衰退過程を中間報告で述べた。

平成6年度は、河内国において栽培されていた綿作地帯と機物神社について考察した。綿の生産形態は最初は農家の自給自足であつたので、寒冷地を除く（北緯37度以南と云う説）ほとんど全国的に広範囲に栽培されていたが、江戸中期の宝永元年（1704）大和川の付替えの大工事が完成し、宝永5年（1708）頃までに旧川床に鴻池新田（旧新開池）深野新田（旧深野池）山本新田（旧玉串川）深野南新田（旧深野池）深野北新田（旧深野池）市村新田（旧大和川上流）など大小48の新田が開発され綿を栽培した事から、河内木綿が名声を博した。綿の生育には、排水良好な川床の砂質地が最適で、綿の収穫量も他を圧して多量となり、やがて河内木綿が商品化され、様々な銘柄が考案される様になった。北河内地域の綿作地域は、深野新田より南地域で、深野より北では余り見られない。

交野市倉治に日本で唯一の織り姫を祀る機物（はたもの）神社が存在する。「河内・歴史の

古里」森迫博美著の中で、氏子総代が「ここ交野は河内木綿の発祥の地ではないかと思うのですが」と書かれており、実際はどうかを機物神社の中村武三宮司を訪ね七夕伝説などいろいろ聴いた。交野には奈良時代より前に、漢人が農耕と織物を伝えたと云われ、桓武天皇が7代70余年の都・平城京から長岡京へ遷都した時（784年11月）通られ、風光明媚な交野を大変お気に召された。当時のご禁製品であった絹織物を極秘に養蚕し、織る様になった。桓武天皇は、「人格すぐれ、華やかなことを避け、広く得をおよぼし」と日本後記に評価されているが、反面「宮殿などの建物および役所や親王・貴族などの邸宅・後宮の建物は工芸の粋を集め、その費用は調庸が用いられた。そのため天下の財政の5分の3を費やしたと云われてる。当時、金と同じ価値の絹織物を交野で、天皇や大宮人のために、極秘に養蚕し織っていたのが推測される。現在でも交野山の頂上に登ると、城陽市・大阪城・淡路島・東大寺の屋根まで見える丘陵で、綿の栽培はしてなかった様で、河内木綿の発祥地との関係は推測し難い。

交野地域には、星に関係のある地名が多い。天の川は天上の天の川と同じ方向に流れているため、逢合橋は彦星と織り姫が7月7日に逢うところ、星田・天田の宮など。また天の川の対岸の枚方市香里に石だけの彦星のしるしがあり、館の建設要望もあるとか。機物神社は、河内木綿とはあまり関係がなく、むしろ星にまつわる七夕伝説などから、絹織物を織っていたところで織り姫を祀る機物神社があるのではと推測される。

今年は、平成7年7月7日と7が3つつづくので盛大な祭りが予定されている。

北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究 谷口興紀（工学部）

前年度に引き続き、「北河内研究データベース」の設計に取り組み、検索システムのサブシステムに焦点を合わせて研究を進めているが、その過程で、各種の地域データを平面的分布図に表示するサブシステムを開発した。その手順は、各市単位での分布図を北河内地域全体に合成するというものであるが、そのとき、各市域を覆っている500m角のメッシュ座標を接続することが有効であることが実証された。また、全体の参照点として、複数の点の経緯度の表示を加えておくことにより、この分布図を他の図に重ね合わせることを可能にしている。

このような分布図を眺めることは、地域を上空飛行的に眺めることであり、巨視的に様々のことを考えさせるが、一方その成果を地域の生活環境デザインに適用しようとするところか不十分な点がある。生活環境のデザインは、上空飛行的観点からだけで成り立っているわけではなく、身近な、等身大的視点も必要ではないか。「そこにある」という等身大的視点から出発し、次第に分節化し、捨象と抽象を経て一つのいわば実験室的モデルを作成し、それを操作するという方向（方法）がある。それは、「この私」から離れて普遍性を目指すので、特定の地域だけでなく、グローバルな方向に展開する。しかし、地域デザインは、特定の敷地・地域と強く結びつくものであり、また、結びつくべきであり、その地域性（敷地性）を捨象するべきでな

く、逆に、いわば物に住みつくと定着性（此処性）ということに一つの特性があると考えられる。そこで、生活環境の研究成果は、その生活環境への還元という視点からの表現が必要となろう。このような視点や表現形式は、地域研究と地域デザインとをリンクする手段となろう。

「地域研究」と「地域デザイン」とを統一的に扱う具体的な試みとして、各種データ（諸施設・地物等）の空間的分布図を単に上空飛行的、平面図的分布としてだけでなく、透視図的に分布を描くという着想を得てそのプログラムの開発に取り組んでいる。このことの意義は、ともすれば研究が現実を、地域性を捨象し、抽象的、図式的になることにより、その成果を再び現実に下ろしてくるとき、つまり、応用という場面を考えたときに露呈されてくる困難を回避させるのではないかと考えられる。つまり、上空飛行的分布図には、物に住みつくとこの観点は希薄であるが、目線の高さの透視図的分布図は、日常生活的目線の高さからの対象視であり、対象を日常生活の視点から位置づけることになる。しかし、このような統一的観点においても、ともすれば、見る「私」が問われることは少ない。その分、地域自体は、「私」に覆われ、「私」に妨げられる。何らかの形で主体性の問題へと踏み込むことによって、地域の再構築という視点が出てくるのではないかと考える。

北河内地域における高齢者の住環境と生活に関する研究

—その2 北河内地域における老人保険福祉計画—

竹嶋祥夫（工学部）

平成元年、急速な高齢化社会に対応できるように「高齢者保険福祉推進十カ年戦略」が策定され、これを受けた形で、各市町村では「老人保健福祉計画」が平成4年までに策定された。本論は北河内地域7市における老人保健福祉計画各事業の現状と目標を比較検討することを目的とするが、主たる概要を示すと以下ようになる。

1) 各市で行われている事業内容をその共通性で示すと表1になり、全市で行われているものから1市のみのものでいろいろの事業内容があることがわかる。中でも在宅福祉の3本柱と言われる「ホームヘルプサービス」「デイサービス」「ショートステイ」はすべての市で重視されている施策である。

2) 7市すべてで行われている事業の内、主要と考えられる[ホームヘルプサービス][デイサービス][ショートステイ][特別養護老人ホーム][在宅介護支援センター]の5項目について比較検討した。それによると、

1. 枚方市 各項目の数量は現状・目標とも最も多いが、市の規模が大きいため、人口当たりでは平均以下となる。しかし、目標値では平均を上回るものもあり、特に「ホームヘルプサービス」「ショートステイ」の伸びは大きい。

2. 交野市 人口の少ないこともあり、人口当たりの現状・目標値はすべて上位の整備状況を示し、総合的には7市のトップといえよう。

3. 寝屋川市 現状・目標値とも枚方市に次いでおおむね2番目であるが、人口が多いため、人口当たり整備状況は平均値以下の状況にある。目標値も他市に比べて大きくはないが、「ホームヘルプサービス」「在宅介護支援センター」の伸び率が大きい。

4. 守口市 人口当たり現状・目標値とも他市に比べて低水準で、総合的には最も低いといえる。「ホームヘルプサービス」の人口当たり現状値のみ比較的高い水準を示す。

5. 門真市 守口市に次いで低い水準であり、人口当たりで平均値より高いのは「在宅介護支援センター」のみである。

6. 四条畷市 現状・目標値とも低い値であるが、人口が少ないため人口当たりの数量は総合的には2番目に高い。特に「特別養護老人ホーム」の値が勝っている。

7. 大東市 現状では各項目とも平均より低い状況にあるものが多いが、目標についてはかなり改善しようとする意欲がみられる。特に「ホームヘルプサービス」「デイサービス」にその傾向が著しい。

3) 各市それぞれ特徴的な様相が見受けられた。しかし、利用頻度が高くポピュラーな事業は各市とも目標値が高いが、現状から考え高齢者の増加に対応し得ないように思われる。そのため、利用頻度の低いと考えられるような事業は他市と共同で実施するなど、利用効率を考慮した計画立案も今後重要な方策と考えられる。

表1 各市における共通事業

7市共通
1. ホームヘルプサービス 2. デイサービス 3. ショートステイ
4. 日常生活用具の貸与・給付 5. 健康診断 6. 特別養護老人ホーム
7. 養護老人ホーム 8. 在宅介護支援センター 9. 老人クラブ
6市共通
1. 健康教育 2. 機能訓練 3. 訪問指導
5市共通
1. 緊急通報システム 2. 健康相談 3. シルバー人材センター
4. ボランティア協会 5. 老人福祉センター
4市共通
1. 健康手帳の交付
3市共通
1. 入浴サービス 2. 給食サービス 3. 軽費老人ホーム
4. 老人保健施設 5. 社会福祉協議会
2市共通
1. 愛の一声運動 2. 鍼灸マッサージ施術費助成 3. 電話友愛訪問
4. 福祉電話の貸与 5. 訪問看護 6. 有料老人ホーム
7. 高齢者住宅整備資金 8. 府営住宅 9. 保険福祉センター
10. 就労対策 11. 敬老事業 12. 当事者組織

北河内地域における環境デザイン手法の操作モデルに関する基礎的研究 榊原和彦（工学部）

北河内地域の住宅地の街路景観的を絞り、そのデザイン手法の操作モデルとしての景観デザイン支援システムの基礎となるべき分析・研究として、北河内地域景観データベース・マネジメント・システムの構築と景観分析を行った。

まず、景観データベース・マネジメント・システムについては、1993年度に調査収集した北河内5市の133地点（地下公示の標準地）の写真（1地点あたり16枚）と文字・数値情報データを収録し、いくつかの項目に関して検索が可能となるものとした。検索項目は、①所在地、②利用状況（住宅、店舗、……）、③構造（鉄筋コンクリート造、木造、……）、④建物階層、⑤交通施設（最寄りの駅からの距離）、⑥道路状況（全面道路幅員）、⑦敷地形状（間口／奥行き比）、⑧法令（用途地域など）、⑨建蔽率、⑩容積率、⑪土地面積、⑫地価、⑬情景記述文キーワード、である。このマネジメント・システムによって、景観分析にとって基礎的な項目に関してデータ検索することが可能となり研究の進展に一役買うこととなった。今後は、画像データそのものに関する項目（㉔景観構成要素種別、㉕景観要素の構成、㉖景観構成要素の量的指標、㉗色彩構成、……）によって検索できるものとした。

景観分析については、北河内地域における住宅地景観の特徴と課題の把握を行うために、対象とした住宅地街路景観の特性分析をした。まず、上記のデータベースを用いて、街路景観構成要素の抽出を行い、それらのあり方に①建築物、②前庭、③敷地囲障、の3空間要素が大きく影響していること、そして、敷地内へのそれらの配置パターンとして、④[前面道路+建物]、⑤[前面道路+前庭+建物]、⑥[前面道路+敷地囲障+前庭+建物]、の3パターンがあり、それぞれに独自の、しかし同一パターンでは比較的類似した景観的特徴を有することや⑥のパターンの数が多いことを確認した。次に、①②③の構成要素それぞれについての景観的特徴を把握するために、配置パターンと建築形態との関係、前庭の広さ、用途との関係における景観特性、敷地囲障の遮蔽性と景観特性などを分析した。さらに、敷地規模・形状との関係において分析し、敷地接道距離・建築壁面距離との関係や敷地の特徴との関係における景観的特徴を把握した。

以上の分析により、配置パターンと敷地規模・形状によって住宅地街路景観の類型化が可能となる見通しが立った。この類型の分布を見ることによって北河内地域の住宅地景観の特性と問題点・課題が浮かび上がって来ようし、類型とその分布をもたらす要因を探ることによって、課題解決の方策を見いだすことができると考えられる。これらを今後の課題として研究を進めたい。

学校教育と地域環境とのかかわりに関する基礎的研究と
具体事例（北河内地域）の調査研究
奥 哲治（工学部）

【中間報告】

A：基礎的研究……地域環境のもつ教育的な可能性について建築的に関心することは、主に環境の物的空間的場所的な構成が、広義の教育的なことから（人間が人間になるということ）にかかわりうる可能性を問うことになる。先に、他者や物とかかわりつつ同時に自己自身とかかわって存在している〈世界内存在〉としての人間の生成のあり方と、建築的な環境との関係についての基礎的枠組みを検討した。本年度は、ひきつづいて、地域環境に建築的に関心するとき、教育的な力をもつと考えられる契機としての自然物、なかでも植物、特に樹木に関心し、環境倫理的な視点から検討を加えた。①植物の特徴は、その場所を動かずに、与えられた条件のなかで、自然の時の巡りにおいて時熟することで懸命に生きる姿にある。大地から芽吹き天空に向かって伸び、端的に時が熟するのを待ちつつ、成長し成熟し、そして再び大地に帰って行く姿である。動かずにひとつの場所に留まるからこそ、その場所でのその時々のかげがえのない意味の連関を時の経過にそって刻むなかで集め続け、そこに固有の雰囲気を形成する。その意味の連関は幾重にも襲をもち、限りなく重なっている。②人間は関係と関係とを相互に関係づけるという固有のはたらきによって、高次の関係の構造としての「世界」をつくりあげる。それを可能にする人間固有のはたらきが意識であるが、意識は時間のなかで自己を育ててゆく。この人間存在の基底のことがらの大切さを、現代社会は顧みず、対象を平板にとらえ、効率性と快適性を無限衝動的に追求して行くが、深みや厚みをなくしたこのような平板な社会において、人間は自分自身の基底である意識という時間性を守ることを、植物のあり方からこそ学ぶことができる。水平的な次元を貫く垂直的な次元を含んだ樹木が限定する場所において、植物の世話をすることが、時間性を必死になって守っている自然とひとつになってともに、〈自然を生かしている力〉の深みではたらきあい、人間自身の内面に本質としての〈時熟〉ということの意味をよみがえらせる契機になりうる。建築的な環境は、そのような深みをもった動的な場所の具体的な限定に参加しなければならないことになる。

B：具体的調査研究……大東市域を中心にしてかつてその独自の景観をなした河川空間を、児童の通学路のネットワークと重ね、子どもたちのアイデンティティー形成空間として蘇生させ、学校教育の場を地域的、都市的なコミュニティーの広がりの中からとらえ直すことの調査研究を行っている。具体的には銭屋川と泉小学校区とりあげ、基礎的景観調査とともに、小学校・通学路・児童館の連結による河川空間再生計画のスタディを「水（川）と緑（植物）」を主題化して行っている。またここに、子どもの原風景や遊び場に関する考察を反映しようと「こころに残る小学校の風景」についての学生作文の分析も同時に行っている。

北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究

中川 等 (工学部)

平成3年度より6年度にかけて、北河内地域における古絵図・古地図など近世・近代期の資料や文献の収集を行い、現在にいたる住環境および民家の形成・展開過程について史的な考察を加えた。これまでの中間報告で既に述べたように、3年度は、河内民家の特徴として高塀造りの分布と瓦葺き民家の早期普及の2点を指摘し、両形式が近世期に普及した歴史的な過程と社会的な背景を論考し、4年度は、両形式の詳細なデータを各種報告書にもとめ、また近世河内の基本資料の一つ『河内名所図会』の分析を行い、5年度は、近現代の地図を網羅的に収集し、もって住環境の変容について考察した。

6年度は、北河内地域における古絵図・古地図の内容を比較検討し、伝統的な住環境に関する現況調査を実施した。現在の北河内地域は一部に田畑が残っているものの、大阪市域から住宅地が面的に拡大し、かつての旧集落はその中に埋没している。これは、大阪市の近郊として急激に市街化が進行した昭和40年代以後の傾向であり、それまでは寝屋川・古川・恩智川などの河川に囲まれて広大な田圃が広がり、縦横に通った古堤街道・東高野街道などの古道に沿って集落が点在していた。

古堤街道は大阪から寝屋川北岸を東進し、住道を経て生駒あるいは田原に通じ、東高野街道は山城八幡から生駒山地西麓を南下し、河内長野で西高野街道と合流して紀州高野山にいたる古道である。ほかに、北河内と大和を結ぶ磐船街道・清滝街道、北河内と中河内を結ぶ河内街道などがある。それらの街道と集落の状況について、享和元年(1801)刊行の『河内名所図会』や、明治期の2万分1地形図及び大正期以後の2万5千分1地形図などにより整理した。一例を挙げれば、『河内名所図会』の「楠正行墳」の図には広大な田圃の中に苧(雁)屋村と塚脇村、そして墳墓・街道・河川・山並などが描かれるが、その位置関係と周辺環境は前述した明治・大正期の地形図の内容とほぼ対応している。

以上の資料分析に基づいて実施した現況調査の結果、企業社屋や工場・戸建住宅・集合住宅・学校・病院などで構成される新しい市街化地域と、古い寺社・民家・橋・石造物・大樹などが存在する旧集落は、たとえ連続的に立地していても景観的には明快な対照をなしていた。民家の場合は、瓦葺き中二階建ての古式なものが少なからず残っており、希に茅葺きが散見し、主屋が改築されていても屋敷構えや門・土蔵に由緒を伝え、またもと茶店であったと思われる建物も見られた。前述した資料から判明する伝統的な住環境は、現在でもそこそこに継承されていることが確認された。

今後は、北河内地域における地域基盤の整備と住宅地の形成過程及び民家建築の変遷について、これまでの成果に基づいて総合的に考察していく予定である。

北河内地域における路傍祠に関する調査研究

浜田ひとみ（工学部）

建築や都市などの生活環境の構成は、もっぱら生活の役に立つという機能的観点から考えられ研究されてきたが、生活環境を改めて見回すと、今まで、身近にありながら見過ごしてきたものとして地蔵、小祠や地神石がある。平成6年より始めた本研究は、生活環境要素の一つであり地域住民が日常生活の中で守り、好ましいもの（地域の住民を守るもの）として位置づけ機能している路傍祠類の分布状況の特性をとらえ、地域生活とそれを取りまく都市空間の現実を明らかにしようと試みている。

調査方法は国土地理院1/2500の地図記載の記号によって表示されている路傍祠類を現地踏査し、その全数について位置、種類、場所的特性、姿・形、管理状況などの実体的データを収集した。北河内地域全域（7市）において調査を行い、全体の分布図を作成し、分布状況について分析し、コンピュータ画面上にプレゼンテーションすることを試みた。数値でのみ得られた調査結果を画面及び図面上で表し、視覚的に考察した。それによると、大東市は7市の中で、存在する路傍祠の数が最も多く、面積に対してかなりの密度で分布していることがわかった。

観察調査を行った路傍祠類の総数は498に上り、路傍祠類を神系と仏系に類別すると、地蔵と不動尊を合わせた仏系は385、神系は61、石碑を含むその他が52であった。それらより、路傍祠類の77%が仏系であることがわかった。

地域との関わりについてみると、管理は町内会が当番制で行っているのが普通であるので、そうすることは住民の地域・町内への帰属性を高めており、地蔵盆の例からも、路傍祠はコミュニティの働きを担っており、社会性をもっているといえよう。

次に、個人との関わりについてみると、毎日世話をしながら彼らは何を祈るのか、そして信仰心とは違った角度から路傍祠を心の拠り所にするといったメンタリティーは日本独特であるのかといったことを知ることを、今後の課題としている。

神社仏閣のような建築物に比べ、路傍祠はスケールにおいて小さいが、その数が多い信仰の対象である。調査からわかったことは管理状況も千差万別であり、単なる石塊として置かれているようなものから、信仰の対象として生きているという状況を呈するものまである。それらは、過去の遺物として道端にはおって置かれてあるのではなく、新しい前かけを掛けられ、水が供えられ、花が飾られ、また地蔵盆の提灯が点灯され、秋になると注連縄が新しくなる。新たに「彼らはいったい何を祈るのだろうか」といった疑問もでてきた。日常の装置としては無くとも済ますことができる路傍祠のようなものが、なぜ存続し続けるのかについて今後も探り、路傍祠の現代的意義を追求していく予定である。